

氏 名	ひろ せ こう いち 廣 瀬 幸 市
学位(専攻分野)	博 士 (教育 学)
学位記番号	教 博 第 51 号
学位授与の日付	平成 17 年 7 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	教育学研究科臨床教育学専攻
学位論文題目	意識・存在フィールドについての心理臨床学的考察 ——イメージによらない心理療法理解——

論文調査委員 (主査) 教授 河合俊雄 教授 岡田康伸 助教授 角野善宏

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、井筒俊彦による「意識・存在フィールド」という概念に基づいて、心理臨床において意識の深層がイメージという媒介をへずに現れてくる事態を考察したものである。

そのためにまず第 1 章では、心理療法におけるイメージが取り上げられた。第 I 部では、イメージを用いた心理療法の本質を、イメージ体験様式(田嶋誠一)、内面性などによって理解しようとされた。第 II 部では、井筒哲学に拠りながら、心理療法との関わりでのイメージが捉え直された。深層意識の領域にある「言語アラヤ識」から生起した意味「種子」の発動で、無分節の存在リアリティが様々な事物・事象に分節される。その際にイメージは「元型」的に分節を行っていくと考えられる。

第 2 章では、「意識・存在フィールド」がどのようなものであるのかについて説明された。常識的な考え方では、様々な事物事象は始めから区分けされて存在しており、それをコトバが後から追いかけていく。それに対して、井筒俊彦の意味分節理論によれば、始めは何の区分けもないカオスだけで、それを人間の意識が、区切りをつけている。心理臨床での経験は、主客構造が解体された際に、意識・存在フィールドが脱我的主体性として甦り、通常の経験的現実の世界で機能することと考えられる。意識・存在フィールドとは、「無心」の主体性の全体フィールドであり、「主体」「客体」を二つの磁極とし、両者の間に流れる意識・存在的緊張のエネルギーの律動のうちに形成される不可視のフィールドでもあると考えられる。

第 3 章では、この意識・存在フィールドの顕現が体験される具体的場面を、「意識する働きそのものが現れる場面を垣間見る」という非日常的体験として考察した。第 I 部では、それを経験する意識状態として、質問紙によって調査された。その結果から、「意識する働きそのものが現れる時の意識状態」は、斎藤稔正の言う「根源的意識」が発現した時の意識状態を表現していると考えられ、解離性体験の意識状態によく似た状態を呈すること、また、変性意識状態との親和性が大きな役割を果たしていることが分かった。第 II 部では、意識が意識する働きそのものを、木村敏の「生命論的差異」という哲学的な思索を手がかりとして論じられた。それぞれ個性をもって生きる個々の生命体と、それを生きものとして成立させている「生それ自身」とのあいだの差異を、Heidegger の「存在論的差異」を参照しつつ、木村は「生命論的差異」と呼ぶ。この生命論的差異という概念を用いれば、本章で見えておいた非日常的体験とは、生命論的差異をふと体験してしまったこととして理解できる。

第 4 章では、意識・存在フィールドを体験する具体的場面として、スポーツ選手のピーク・パフォーマンスに対して、2 通りのアプローチが試みられた。第 I 部では、従来からある研究法のアプローチとして、数量的研究と事例研究という方法論を用いた。数量的研究では、ピーク・パフォーマンス時の精神的状態の構造を調べた先行研究の追試を行ない、その比較を行った結果、因子構造において一応の対応関係を認めることができた。事例研究においては、ピーク・パフォーマンスの最中の特殊な表現は、行為の最中において経験的主体が「無心」的主体を看取している感じとして理解できることがわかった。第 II 部では、スポーツ選手の手記というテキストを心理臨床学的に取り扱うというアプローチが取られた。ピーク・パ

フォーメーションにおいて生じている事態を「心理学的」に捉えた結果、「内的墜落」、「真のアイデンティティの獲得」等の概念が形成された。自分の習慣や態度のような古いパターンを放棄するということを果たし得た選手達は、ピーク・パフォーマンスにおいて真のアイデンティティを獲得し、本質知に触れ、より深い智慧を経験するのだが、このために選手達は、常に繰り返し内的な無限性に身を捧げる行為をしなければならない。このような行為が要請されているという事態は、心理臨床家にとって、自身の心理臨床学的意識を何度でも絶えず繰り返し獲得し続けなければならないという、あり方も密接な関係があると考察された。

第5章では、清水博が提唱している即興劇モデルに基づく、場所論的心理療法モデルが取り上げられた。清水による生命の「即興劇（共創）モデル」によると、「舞台」で「演技」をする「役者」の内部では創出サイクルが回っており、場所的領域と自己中心的領域が交替しながら働く。このモデルを心理療法の場面に適合するように修正・翻訳したものを、場所論的心理療法モデルとした。これによると、本来「人生の場」と「生活の場」の相互誘導合致によって編み出されてくる人生という歴史ドラマに、無限の論理循環が生じたために、クライアントは自ら歴史ドラマを創出し続けることができなくなっている、と考えられる。クライアントは、心理療法の場で、創出サイクルが回り続けているセラピストと、特殊な関係で会うことにより、遍在的自己をより反映した「場所モデル」を身体で感じ取って、自分の内部に生成することができるようになり、自分自身で即興劇を演じられるようになって、心理療法の場を去っていく、と理解できる。

第6章では、場所論的心理療法モデルに西田哲学後期の「行為的直観」の視座を導入して、心理療法を捉え直す試みがなされた。このようにして得られた心理療法モデルによれば、個物であるクライアント・セラピストと世界である「心理療法（世界）」との相互限定が明確になったと共に、一般者の自己限定から、「心理療法（世界）」と絶対無との関係が明らかになった。更に、これらの総合として、「心理療法」を「行為的直観」的に進み行く弁証法的運動として捉えることができた。このように、クライアントの中で生じていることだけでなく、クライアントとセラピストとの関係性、あるいはクライアントと「心理療法（世界）」との関係性を見ていくことが可能になった。新たに開かれてきた視点から見ると、意識・存在フィールドは、場所的機能と媒介的機能という、互いに方向性の異なる側面を同時に併せ持った二重構造を有しており、それらは、元々同じものの2側面であった非対称なもの組み合わせである。これらの機能を、心理療法の場面で相応する働きとして検討してみると、意識・存在フィールドは、場所的機能の面から見れば、「心理療法（世界）」と同等の機能を果たしていると言え、媒介的機能面から見れば、「心理療法（機能）」と同等の機能を果たしていると言える。最後に、自己の弁証法的運動としての心理療法の理解が示された。

#### 論文審査の結果の要旨

本論文は、井筒俊彦による「意識・存在フィールド」という概念によって、またさらには西田幾多郎における行為的直観と場所の考え方を参照しつつ、心理臨床において起こっていることの深層を捉えようとしたものである。著者も指摘しているように、深層心理学における従来のモデルにおいて、心理療法の深層において生じてくることに関しては、意識に対立する無意識という概念を用いて、またそこに現れてくるイメージという媒体によって捉えられることが多かった。これに対して本論文は、あくまで意識の深層という連続したなかで見えていき、またイメージという媒体によらない深層の捉え方を目ざすもので、その着眼点の独創性は高く評価できよう。

そのために著者は、イメージという深層の媒介的で、本質に規定された分節ではなくて、無媒介的で、無本質的な分節をする禅仏教や、西田哲学によっている。これは唐突なように思われるかもしれないけれども、心理療法におけるやりとりが、しばしば答えが見いだせなかったり、どの答えも否定されたりする禅問答的なものであること、また心理療法における治療関係が、主客に分かれているようなものでないことからすると、必然性のあるアプローチであると言えよう。心理療法において、逆説的な展開が多く見られることも、無媒介的な分節に関わっていると思われる。

その際に著者は、井筒俊彦の論考と、西田幾多郎の、特に後期の著作によっている。心理療法にとっては異分野である領域を取り上げたために、本論文は詳細に両者の考え方を紹介し、心理療法のために解説しているけれども、難解な思想や概念の理解、導入の仕方も適切で、その点でも高く評価できる。

井筒俊彦に関しては、すでに河合隼雄や岸本寛史がその考え方を心理療法に適用しようとしていたが、まだモデル的な使

用としてその端緒にとどまっております、本論文はそれをさらに包括的に心理療法に取り入れようとしたものと考えられる。本論と違う立場になる、イメージによる分節に関しても、井筒の論考に基づきつつ、「言語アラヤ識」からの分節として、最初に検討されている。

また西田幾多郎の思想に関しては、既に木村敏がその様々な著作において、精神医学への導入をはかってきた。しかし木村敏においては、それがまだ現象学的な、患者を対象とした、しかもスタティックな分析にとどまっているニュアンスが強いように思われる。それに対して、本研究は、西田哲学から出発しつつ、たとえば主客未分の状態など、心理療法において起こっている事態を、しかも心理療法の過程に関連して、動的に捉える方向を旨としているもので、画期的なものであると言えよう。クライアントは、何らかの事情で自己という弁証法的運動が阻害されていて、それを復旧するために、「心理療法」という弁証法的運動に参入し、そこで自身の弁証法的運動を回復し、やがて心理療法から離脱して、元のように一人で自己という無限の弁証法的運動を続けていく、となる。また心理療法に参入したクライアントは、セラピストとの相互作用を通して、セラピストの主体に関する態度を取り入れたり触発されたりしながら、自らの主体のあり方を変容させるという理解は、心理療法における中核的なものを捉えていると考えられる。

著者が井筒俊彦、さらには西田幾多郎によりつつ提示している、心理療法における「意識・存在フィールド」とは、様々な先入観や固定観念による区別や、主客の対立がなくなった無心の主体性のフィールドである。これはこれまでの症状や悩み、思い込みというのが、自ら行き詰まってしまって、しかも治療者に教えてもらおうという姿勢さえも崩れてしまった状態であると考えられる。通常はこのような状態から、あるいはこのような状態に至るまでに、何らかの方向付けがなされるのが心理療法の技法であるのだが、本論文は、そこから無媒介的に、無本質的に展開したり、結果が生じたりしてくるのが心理療法であると捉えており、非常に興味深い視点であると思われる。このような心理療法の理解は、ある種の精神分析における心理療法を二者関係から考えていく転移・逆転移の理解や、具体的な方向付けをしていく認知行動療法や、イメージや物語による展開を進めるような深層心理学的な心理療法と全く異なっており、「意識・存在フィールド」という視点からの心理療法が、どのようなパラダイム展開をもたらしてくれるのか、今後に期待できる場所である。

このような綿密かつ詳細な文献的・理論的研究をふまえて、著者の取り上げた具体的な事象は、スポーツにおけるピーク・パフォーマンスと即興劇である。このことには、イメージによる媒介に基づかない心理療法や人間存在の理解を行う際に、著者が身体と行為に注目していることを示唆していると思われる。ピーク・パフォーマンスにおいて、経験的主体と「無心」的主体の関係が大切で、いわば無から行為が生じてくること、また手記の解釈が示してくれたように、それぞれのピーク・パフォーマンスが、消失してからの新たなアイデンティティーの獲得であるという考察は示唆に富んでいる。これは著者も述べているように、まさに一人一人、また一回一回、個別に無から答えを創造せねばならない心理療法の事態に沿っていると思われる。

本論文に関しては、ピーク・パフォーマンスの分析や、即興劇という形でのマテリアルの扱いにどとまらず、実際の心理療法の事例にふれての考察が望まれるという指摘がなされた。具体的な事例研究までは必要なくても、もう少し心理療法への参照がなされた方が理解しやすかったかもしれない。またこれに関連して、やや議論が抽象的すぎるという批判もあった。しかしそれも、イメージや物語という媒介的な分節を避け、無媒介的な分節が大切であることを強調したという本論文の姿勢に関係していると思われ、無媒介的な分節ということを一貫して心理療法に関係づけてきた本論文の価値をそこなうものではないと考えられる。

よって本論文は、博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成17年6月1日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。